

あなたの心は 一人だけですか？

人の多面性から多重人格まで

福島 淳 イラスト・福島麻衣子

宮崎勤事件における多重人格性、ベストセラーの 24人のピリー・ミリガン
今や、多重人格は別世界の物語ではなくなった。しかし、我々の心にも、
多重人格ならぬ多面性は存在するのである。



多重人格とは文字どおり、いくつもの人格が一人の人に交代して出現することを言う。場合によっては、いくつかの人格が同時に存在することもあると言われる。しかも、統合を失った、分離したそれぞれの人格は、別々の思考や感情、記憶を持つ。つまり、しぐさや服装、筆跡まで全く異なった人格たちが、一人の人間の中に誕生するのだ。もちろん、これは紛れもなく病気であるが、健康な人間にも、日常生活に多面性という形で、色々な自分が存在する。そこには様々な矛盾がうずまいて、立場が変われば意見も変わるといえるのは、よくある話には違いない。

例えば、人は生活していく上で、状況や相手によって接する態度が変わる事がある。自分より目上の人物には、気に入られるようと齒の浮くようなお世辞を言つて媚びる人間が、その一方で、目下と判断した相手には人が変わったかのようにぞんざいな態度をとったりする場合。これはむしろ、日常的に見られることで、特別な例というわけではないだろう。意識して態度を変えているわけではないが、相手によって、知らず知らず別人のように振る舞つてしまつ傾向は誰にでもあるのだ。自分は、誰に対しても公平にふるまっている。相手によつてコロコロ態度を変えたりしない、などと思つていても、実際は自分の都合で変わつてくるのである。

もちろんそれは、社会的に充分適応しており、変人、奇人と言われていない人の話だ。

例えば、身近な親子関係で考えてみよ

う。親から見れば、子供はいくつになつても子供である。母親は、たとえ息子が成人し、いい年をしたオヤジになつても、いつまでも 自分の子供 という意識からは離れられない。もしもこの母親が心配性だとすると、よかれと思つて世話をやく干渉が、第3者の目には、異様な親子関係に映る場合もある。息子の方も、いい年をして乳離れできていない姿はふがいない。しかし母親から見れば、嫁より誰より、自分の言うことをよく聞く息子はかわいいのである。ではこの母親が、嫁の立場だつた場合を考えると、もしも夫が、いつも自分より姑を優先し、嫁姑関係でトラブルが発生しても、必ず母親側についてしまつたらどうするか。そんな夫に、妻としては孤独を感じないだろうか。親の反対を押し切つても、一緒になつてくれるくらいの夫こそ、嫁から見れば最高だと言えよう。

言いかえれば、彼氏や夫がマザコンであるのはいやだが、母親になつた時、自分の息子には少しマザコンでいて欲しかったりするのが本音なのだ。もちろん、建前はマザコンでは困ると思つているのがミソ。もつと言いかえると、夫が自分の言いなりであるのは良いが、息子が嫁の言いなりであるのは許せなかつたりする。

このように、それぞれの人間関係の中で、人は多種多様な面を見せ、立場が変われば意見も変わり、一人の人間にも正反對の矛盾が生まれる。これは人間の多面性として理解するべき点だと思つ。しかし恐ろしいことに、自分の中に生まれる数々の矛盾に気がつく人は、なかなかいない。

立場変われば意見も変わる!



妻の立場では
かかあ天下



母親の立場では
亭主関白のススメ

意見よ、
亭主関白になりなさい、
娘のまにまにさういふよ!!

あき

その時、その立場では、それが正しい、あるいは普通の考えであったりするからだ。自分は、絶対にこれで正しいと思っていて、立場が変われば、全く違う対応が普通だったりするのである。おそらく、それに気がつかない故に、人間関係にトラブルが発生するのだから。

さて、深刻なのは、状況によってその人となり人格と言ってもいいだろうか豹変し、本人がそのことを意識して理解できない場合だ。つまり、ある状況で一つの言動パターンをとっている人が、他の状況では全く別人のようになってしまう、という例である。しかし、その人はそれぞれの状況で、自分の態度が変貌していることが判らない。他人に指摘されて意識できればいいのだが、この人の場合、完全に人格が二つに分かれてしまっている。

本来のその人の人格がどちらかという見方をすれば、もう一つの人格は、元々の人格との関係を失い、全く別の感情や思考、記憶を持つようになっていくのだ。これを『多重人格』と言う。そして、その人格の数が増えていけば、多重人格ということになるのである。

この病気は、大きな分類で言うと、解離性障害という範疇に入るのだが、他には、記憶喪失とか、全く自分の名前や生活史を忘れ、全く別の地で、今までは違う生活を始めしてしまうというのもある(これをフグという)。前者はある部分の記憶の解離であり、後者は広範囲の記憶の解離ということが言えよう。

解離性障害は、幼少期から青年期に身

体的、精神的虐待を受けてそれらが心的外傷となっている人に発症しやすいと言われている。随分前になるが、眠っている赤ちゃんをコインロッカーに入れて、両親が遊びに行ってしまうという事件があった。こういった話は氷山の一角かもしれない。表面には現れず、子供に対する虐待は増えている可能性は十分にある。自分は虐待しているのではない、教育しているのだと思いつているケースも含めると、相当の数になるかも知れない。

不幸にして、多重人格という精神障害を患った彼らは、これらの虐待という体験を苦しみ、そこから逃れるために、無意識の世界にこれらを抑圧するか、こういった体験をしたのは自分ではないと、苦しんでいる自分の一部を分離させ、もう一つの人格を作らざるを得ないのである。そして心的外傷は、虐待といった、比較的可成りな原因からのみ作られるのではない。でもものは打たれるといった教育制度からくる歪んだ平等主義や、皆と同じでなければ仲間はずれにされるといった恐怖感、それらは現代の若者たちに自分自身を見失わせてしまう結果を招いている。これも彼らに心の傷を生じさせるのだ。

そして、この心的外傷が心の奥底に潜み、本音と建前が離れていくほど、現実の世界から離れていく自分ができる。彼らの心情を表している、ムカツキ キレル といった言動は、心からの悲痛な叫び声ではないのか? 今一度、こういった社会を作ってしまった我々自身、反省しなければいけないようだ。